

ニュースレター

★2006年度定例総会特集号★



5月27日(土)に高田短期大学講堂(津市)にて定例総会が開催されました。

会長挨拶

おかげさまで我が協会も創立8年目を迎えることができました。これまで全国の協会がそれぞれ活動をしていましたが、愛知万博を契機に名古屋の全国大会で日本オーストラリア連合会ができました。三重の協会もここに加盟して、理事という形で傘下に入りました。今後は、協会独自の活動のほか、全国的な視野をもって、会が発展していけると思います。第1回の豪NZ友好親善の旅で豪・カウラに行きました。日本人戦没者・無名戦士の墓があるところですが、そこで豪日連合会の発足会があり、我々も参加しました。今年は、日豪友好協力基本条約署名30年目にあたり、また日本の在外公館が豪にできて110年になります。我々も、市民フォーラム、小中高生対象の随筆募集、四日市のオーストラリア館で秋にオーストラリア物産市があるのに参加を予定しておりますが、会員の皆様の御理解、御協力を進めて参りたいと思っております。どうかよろしくお願い致します。

新会員承認

個人8名、2家族が新たに会員となりました。

役員改選

監査に高増静子さん、会計担当理事に西村忠祐さんが選任されました。

2006年度役員およびオフィス担当者 (注) はグループリーダー

【総括オフィスグループ】	【教育広報オフィスグループ】	【事業オフィスグループ】
会長 宮本忠(留任)	教育 畠山義啓(留任)	ショート・ロングステイ 増田陽一(留任)
秘書 宮本由紀子(留任)	会報編集印刷 梶美保(留任)	生活 大野福代(留任)
副会長 井ノ口輔ひろ(留任)	会報校正 藤山真澄(留任)	経済 北出勲(留任)
副会長 小山良一(留任)	会報管理保管 米倉芳周(留任)	自然 宮川村(留任)
会計 西村忠祐(新任)		スポーツ 松阪市(留任)
監事 高増静子(新任)		[参考]特別顧問ジェトロ三重

2005年度活動報告

- 4月16日 浜名湖日本オーストラリア協会・浜名湖日本ニュージーランド協会合併発足式典。会長、宮本由紀子出席
- 5月14、15日 全国日豪協会連合会設立総会名古屋大会。会長、井ノ口副会長、宮本由紀子、井ノ口節子、天野宗次、天野美保子出席。
- 5月21日 定例総会、スピーチパーティ(フォレストピア 宮川村)会報13号参照
- 5月22日 宮川ツアー、山荘祭り 会報13号参照
- 6月6日~11日 JRPS(日本網膜色素変性症協会)三重 NZ親善交流旅行を後援。引率者:会長、増田陽一、立石智保、宮本由紀子 会報13号参照
- 10月24日 例会 テーブルマナー講習会(フレックスホテル 松阪市)
- 10月29日~11月11日 第5回豪NZ友好親善の旅 オーストラリア 会報14号参照
- 12月23日 例会 (パーダーポルン 津市)

2006年1月27日 三重大学人文学部留学生交流会(三重大学) 会長、井ノ口、小山副会長、宮本由紀子出席。
 2月16日 オーストラリア・インポート・アワード小山さん授賞式(名古屋市) 会長、山口、宮本由紀子出席。

会報14号参照

ニュースレター発行 第13号8月25日、第14号5月8日

Eメール配信 随時

ホームページの管理運営

2006年度活動予定

日豪交流年記念事業その1 市民フォーラム(公開)

日豪交流年記念事業その2 小中高生随想随筆コンクール

日豪交流年記念事業その3 オーストラリア物産市(四日市オーストラリア館)

第6回豪NZ友好親善の旅~ニュージーランド世界自然遺産など

浜名湖全国日豪協会連合会総会・理事会 7月1日、2日

ニュースレター発行

Eメール配信

ホームページの管理運営

例会の開催

2005年度決算および2006年度予算について

2005年度会計報告

(自2005年4月1日~至2006年3月31日)

収入合計 1,419,041円

支出合計 725,432円

収入の部

項目	細目	金額	備考
会費	個人・家族 法人会費	281,500	個人71,500円(27) 家族70,000円(14) 法人140,000円(14)
諸収入	雑入	405,306	預金利息6円 総会負担金204,300円 補助費200,000円
前年度繰越金		732,235	2004年度繰越金
合計		1,419,041	

支出の部

項目	細目	金額	備考
報償費		10,000	会報編集補助10,000円
役員行旅費		20,000	4人(会長他)
旅費		17,880	浜名湖参加交通費9,680円(2人分) 全国大会参加交通費(名古屋)8,200円
宿泊費		0	
需用費		128,557	消耗品費(封筒など)4,447円 会報印刷(け・紙)124,110円(2年分)
役務費	通信重費	43,920	郵送料42,230円 振込料1,690円
備品購入費		0	
負担金	事業参加負担金	56,000	全国日豪協会年会費10,000円 全国日豪協会参加費40,000円 浜名湖参加費 6,000円
使用料	会場借上料	0	
事業助成費		449,075	総会費 209,075円 J R P S 240,000円
予備費		0	
合計		725,432	

差引残額 1,419,041円 - 725,432円 = 693,609円

693,609円を次年度に繰り越す。

以上の通り、ご報告します。

2006年3月31日 会計 井ノ口節子

2005年度の三重オーストラリア・ニュージーランド協会の会計について、
 監査を行ったところ、適正であったので報告します。

2006年5月2日 監査 若林 祥男

2006年度収支予算

(自2006年4月1日~至2007年3月31日)

収入の部

項目	細目	金額	備考
会費	個人・家族 法人会費	285,000	個人(30) 家族(14) 法人(14)
諸収入		21,391	預金利息・雑収入
前年度繰越金		693,609	2005年度繰越金
合計		1,000,000	

支出の部

項目	細目	金額	備考
報償費	講演謝礼	40,000	各種事業の講演謝礼
役員行旅費		20,000	役員行旅費(5,000×4)
旅費		60,000	講演謝礼を含む 行事参加旅費
宿泊費		50,000	行事参加に伴う宿泊代
需用費		100,000	消耗品費・会報印刷・食料費 (講師茶代)
役務費	通信重費	80,000	郵送料等(切手・葉書代)
備品購入費		35,000	協会事務用品購入
負担金	事業参加負担金	60,000	中部日豪合同セミナー 日本NZ友好協会合同大会 2006年度日豪協会全国会議 その他
使用料		40,000	会場借上料(総会・各種事)
事業助成費		200,000	各種委員会実施事業に対する 一部助成
予備費		315,000	
合計		1,000,000	

第6回豪NZ友好親善の旅について
NZ 親善交流の旅～ニュージーランド南島世界自然遺産など
〔特徴〕世界自然遺産・スチュワート島と遊ぶ



第一班 本格的トレッキング - ミルフォードトラック (3泊4日、57km)

定員：7名。リーダー 北出勲

第二班 軽快トレッキングとダニーデン、スチュワート島

定員：7名。リーダー 増田陽一

期日：11月23日(木)～12月4日(月)の12日間

留意事項：現在、空港、飛行機はまだ未確定ですので以下の行程は予定です。なお、全日程の参加ではなく、部分的に参加希望の方はご相談ください。

- 1日目 セントレアまたは関西空港から出国
- 2日目 オークランド国際空港 クイーンズタウン
- 3日目から二班に別れ9日目に再び合流

第一班

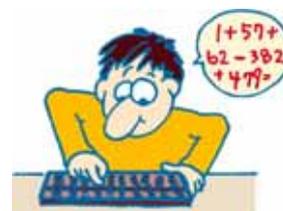
- 3日目、4日目、5日目、6日目そして7日目
ミルフォードトラック踏破
- 8日目 クイーンズタウンで休息
- 9日目 ペンギンのオマルにて2班と合流。
- 10日目 南島の中心都市クライストチャーチ
- 11日目 NZの最大都市オークランド
- 12日目 オークランド国際空港からセントレア
または関西空港帰国

第二班

- 3日目 ルートバントレッキング
- 4日目 クイーンズタウン大自然の拠点～レンタカー始動
- 5日目 最南端都市インバカーギル
- 6および7日目 フェリーボートでスチュワート島
- 8日目 スコットランド伝統漂うダニーデン(レンタカー)
- 9日目 1班と オマルにて合流
(以下一班と同じ)

〔旅行概算費用〕(円)

	第一班	第二班
チケット	100,000	100,000
ホテル	6,000*3	6,000*3
モーテル	3,500*3	3,500*7
レンタカー	1,700*3	1,700*8
ツアー	135,100	11,400
食事	1,500*5	1,500*10
雑費	3,800	10,400
船		7,100
計	280,000円	200,000円



費用は飛行機運賃によって大きく変わります。



{旅の責任主体と協力} 本旅行の形は個人旅行の集合体です。すべての責任は個人に帰属します。この旅が楽しく、安全、安心、かつ充実するよう、各人ができる範囲内で、作業を分担し、協力いたしましょう。

{詳細お問い合わせと申し込み} 7月31日までに宮本、電話 059-368-2112 まで。

ご注意：多数の参加が予想されます。そのため、定員になり次第、締め切らせていただきます。

日豪交流30周年記念事業その1 市民フォーラム(公開)

日時：2006年5月27日(土)14時から16時まで

会場：高田短期大学講堂

総合司会：畠山義啓(高田短期大学助教授。英語学。毎年オーストラリアの学校に研修学生引率。)

コーディネーター：宮本忠(三重大学名誉教授。環境学博士(phD)。英、豪、NZで長期研究生活。)

趣旨

2006年は日豪交流年です。本年は、日豪友好協力基本条約署名30周年、豪日交流基金設立30周年そして日本在外公館豪州開設110周年に当たります。記念すべき年です。両国・国民関係のますますの発展を目指してさまざまなイベントが行われています。当協会におきましてもこれに呼応してこの市民フォーラムを開催することになりました。これをきっかけに皆さんとともに国際交流の輪を広げたいと思います。

統一テーマ：日豪交流～現在、過去そして未来

話題提供(講師 アイウエオ順)

- ・石渡由佳さん「ホームステイで経験したこと」
高田短期大学 幼児教育学科2年生。高校、短大においてオーストラリアでの研修に参加。
- ・上田克史「楽しきかな！空の旅」
オーストラリアの翼、カンタス航空関連会社、カンタスホリデーズ名古屋支店長。空の旅のエキスパート。
- ・加藤栄さん「駐在員が見たオーストラリア」
日本トランスシティ株式会社 参事(元 常務取締役国際輸送部長)
極東冷蔵株式会社(弊社グループ会社) 監査役。元シドニー駐在員。
- ・上月晋吾さん「ミートパイの夜明け」
Rio Pies。滋賀県大津市。統括責任者。
- ・堂東美春さん「異文化と共通点」
三重大学人文学部卒。大学時代は言語学・社会学を勉強し、タスマニア大学に1ヵ月ホームステイ、それをきっかけに1年間交換留学生として留学。また内閣府青年国際交流事業世界青年の船平成17年度参加。現在社会人1年生。
- ・安田元喜さん「いなべ市の海外交流～タスマニアとの交流の歩み」
いなべ市国際交流協会会長、桑員日中友好協会会長、三重県日中友好協会副理事長。
- ・リチャード・セニヴィラットナ
「なぜ日本とオーストラリアの関係が大事なのか」
飯野高等学校にALTとして勤務、英語とテニスを教えている。9月から日生学園の方で新しい仕事が始まる。大学で5年半法律と科学を勉強。パレーボール(津親和メンバー)日本語が大好きですので、日本の映画やテレビ等を見たり、本や雑誌などを読んでいる。



上月さんによるオーストラリアミートパイの販売

宮本会長挨拶にかえて



NHK ニュースでニューサウスウェールズ・カウラのことを報じていました。我々の第1回の交流親善の旅でカウラでの豪日協会全豪大会に行ったときに、ちょうど豪日連合会が発足したのですが、ここには、旧日本軍人の墓があります。第2次世界大戦で日本軍がダーウィンを爆撃したときに豪の迎撃で戦死した日本兵などの墓地です。両政府でも、自治体でもなく、豪の市民がボランティアで遺骨を集めて、無名戦士の墓として、守り続けて、毎年慰霊祭をしてくれています。豪の歴史学者がカウラを訪問してそれを知り、5年かけて調べ、日本の遺族に連

絡しました。最近、遺族が御礼とお参りに行った。そんな内容でした。今日はパネラー7名の皆さんの経験を分かち合っていて、国際親善のために、一体どのように手をつなぎあって、仲良くしていけばよいか。それがどのような力になるかについて皆さんとともに話し合いたいと思います。こういう地道な歩みが現在の国際情勢の中で、大切になってくると思います。

*編集部注 「カウラ日本兵集団脱走事件 The Cowra Breakout」1994(昭和19)年8月5日、1200名近い日本兵が脱走、234名が戦死、16名が自決、豪人も4名死亡。豪日とも、この事件を秘密にしていた。また捕虜となったことを恥とし、偽名を使った者も多かったので長く身元が判明しなかった。土屋康夫「カウラの風」KTC出版 2004年2月発行 1680円ハリイ・ゴードン著/山田真美訳「生きて虜囚の辱めを受けず カウラ第十二戦争捕虜収容所からの脱走」清流出版 1995年11月発行 2039円中野不二男「カウラの突撃ラッパ 零戦パイロットはなぜ死んだか」文芸春秋 1984年7月発行/文春文庫 1991年10月発行(共に絶版 図書館か古本屋で探して下さい。)

石渡由香「ホームステイで経験したこと」



私は中学2年のときに一度オーストラリアに行き、今年の3月にも行った。私が最初に英語に触れたのは、5才のときにハワイに行って、動物園で自分と同じ年くらいの女の子が英語を話しているのにとても違和感を抱き、母親に「どうしてあの子は英語をしゃべっているの?」と聞いたのがきっかけだった。そのときは自分が日本語をしゃべっているから、皆日本語をしゃべるのが当然だと思って生活していたので、英語という言葉がととても不思議な言葉で、とても魅力的なものにきこえ、帰国後、英語を習い始めた。

ハワイに行くきっかけは母の友人の結婚式だったが、それに対し、「私はオーストラリアで結婚式をしたい」とそのときから言っていたそうである。私がオーストラリアという国をどうして知ったのか、その当時の記憶は全く無いのだが、その頃からオーストラリアの魅力に取り付かれていたようだった。

小学校にあがったときは、たくさん外国人の友達がいる、外国人や外国語とふれあうことに対して、小さい頃からずっとつきあってきたので、全く違和感が無く、そのまま全て受け入れられる状態で過ごしていた。中学校にあがって、英語にととても興味をもち、一生懸命勉強したが、なかなか文法が自分の中に入ってくなくて、英語の成績は真ん中くらいで、好きではあったが、特に得意な教科ではなかった。英語は、コミュニケーションの授業がととても好きで、積極的に発言したり、廊下で先生に会ったときには、英語で日常会話をしたり、とにかく英語とふれあうことは多かったように思う。

中学2年のときに、希望者だけのオーストラリアでのホームステイがあった。家族と離れて過ごすのはすごく不安があり、とても迷って、なかなかふんぎれなかったが、母の「あなたがオーストラリアに行きたいと言っていたのは幼稚園の頃からでしょう。行ってきなさい。」という一言で、オーストラリアに行くことを決めた。このときは、先生方が事前に指導を下さって、とにかくオーストラリアの習慣というものを日本にいる時点から、いろいろ教えられて行ったが、それが先入観になってしまい、とても負担になった。例えば、「オーストラリア英語の発音で サンデー が サンダイ になるのだよ」とヘンな発音の違いをとにかく言われ「オーストラリアでは必ず部屋のドアを少し開けておかなければならない」という習慣をすごく植えつけられていて、それがすごく負担になった。そのときは、イギリス人夫妻の家庭だったので、オーストラリア訛りのある発音は一切無くて、普通の日本で習っている英語と同じような発音でしゃべっていた。ドアを開けておくという習慣には、自分自身がくつろぐことができずにいて、ストレスから体調を崩してしまい、最後には少し寝込んでしまった。実際にその家庭では、ドアはよく開いていたので、そうしておくのがよかったとは思いますが、自分の中では負担になってしまったので、もう少し上手く対処できればよかったと思う。今年の3月にホームステイした家庭は、純粋のオーストラリア人家庭だったが、ドアを開けておくという習慣がほとんどなく、部屋に入っているときはしまっていた。自分の中では、オーストラリア人家庭では、絶対ドアは開いていると思っていたので、少し違和感があったが、ストレスを感じることなく過ごせたのはよかったと思う。

今回の家庭では、とても温かく迎えてもらうことができた。事前に自分のプロフィールを送った際に、「イルカが好

きです」と書いておいたが、返事の手紙にはイルカについては一切触れられておらず、「海に連れて行ってあげる」といった言葉は一切無かったので、きっと何もないのだろうなあと思っていたら、ホストファミリーと対面し、家に帰る途中、ホストマザーから「あなた、イルカ好きなのよね。今週の日曜日、晴れたら、イルカと一緒に泳ぎに行きましょう」と言われ、とても驚き、人の温かさに触れた気がして、とても嬉しかった。オーストラリアの海は本当にきれいで、イルカと一緒に泳ぐことができ、とても嬉しかった。また家族の温かさに触れて、それが一番嬉しかった。

中2のときは、お肉を食べることが多かった。お肉を食べるにしても、1種類しか出てこないことが多く、BBQのときも、鶏なら鶏だけ、羊なら羊だけと、決まったお肉しか出なかったのも、オーストラリアでは1つのお肉だけと決まっているのかな、と思っていたが、今回は、毎日すべての種類のお肉が出る家庭だったので、やっぱり日本と同じくらい、オーストラリアだからこう、というふうに勝手に決めつけてしまうのはよくないのだなと思った。

日本でも、オーストラリアでも、どちらでも同じで、それぞれの家庭があって、ひとりひとりがいる。日本とオーストラリアという国は違って、母国語としている言葉も全く違うが、人間と人間なので、生活しているということは同じで、いずれにしても温かさがあり、心は通じている。言葉は違って、なかなかうまく英語を使うことが出来なくても、いろいろ伝え合うことはできるし、心が通じていれば、つながることができるのだと感じた。

上田克史「楽しきかな！空の旅」～航空会社、旅行会社から見たオーストラリア～



最新の資料によると、日本から海外への渡航者数は平成17年度1740万人、逆に日本へは600万人くらい。政府が海外から日本に来る外国人旅行者を増やしたいとビジット・ジャパン・キャンペーンを行っている。私がこの業界に入った15、16年前はまだ1000万人に達していなかったのも、航空会社、旅行会社は1000万人突破を目標にしていたが、いったん1000万人を超すと、あれよあれよといううちに1500万人を超えて、おそらく今の予測では、ここ数年のうちに2000万人に達するだろうといわれている。その中でオース

トラリアへは年間約70万人が日本から行って、ほぼ横ばい。逆にオーストラリアから日本へは年間約20万人。日本人の憧れの海外渡航先といわれているハワイへは150万人、ざっとオーストラリアの倍。国別ランキングでは、オーストラリアは残念ながらベスト10に入っておらず、13、14位あたり。今、日本によく来ているのは台湾人。日本人がハワイに行くのが150万人と言ったが、日本に来る台湾人は約120万人。ほとんど顔が一緒なので、街を歩いていてもわからないが、そのうち150万人を超えるのではないかな。

これだけ民間交流が活発になってきた背景には、航空会社の供給が飛躍的に伸びたこともある。カンタス航空では日本からオーストラリアの各都市へ週62便、年間約70万席を用意しているが、なかなか全ては埋まらない。航空会社というのは、2国間（例えば日本とオーストラリア）で協定を結んで飛行機を飛ばしている。交流をした上で飛ばしているわけだが、目的地に飛ばすだけでなく、その国の上空を飛ぶのにも2国間協定というのは必要。（日本とオーストラリアの場合は、ほとんど海の上なので、比較的簡単な方に入る）10年以上前、ヨーロッパへ行くときはアンカレッジを経由していた。これは、その当時のソビエトが上空を飛ばせてくれなかったため。冷戦の真只中で、ソ連の上を飛ばせば、一発で撃ち落とされてしまう状況だった。冷戦が終わり、ロシアになって、今は簡単にロシア上空を飛べるようになった。ただし、結構高いお金を払っている。タダで飛ばしてはくれない。でもそのおかげで、以前よりだいぶ速くヨーロッパへ行けるようになった。現在はもうアンカレッジには飛行機は降りない。直行便ばかり。以前は皆アンカレッジで行きも帰りもお土産を買い込んでいたが、今は営業していない。今、2国間協定で問題なのは、政治的な問題もからんで、台湾と中国。航空会社は、必ず、何かあったときに飛行機をどこに降ろすかまで決めた上で飛行機を飛ばしている。航空機に問題があったときは当然だが、目的地の空港が閉鎖されたり、あるいは天候で使えなくなったりしたときに、どこに降ろすかまで考えた上で飛ばしている。今、中国に降りる航空会社は台湾には降りず、逆に台湾に飛ばしている航空会社は中国には飛ばない。これは完全に中台の問題で、日本航空は中国に就航しているが、台湾には絶対飛行機は入れない。日本アジア航空は台湾に就航しているので、中国には乗り入れない。政治的な部分と、あとはお客様

06/7/10 第15号

がない所に飛ばしても意味がないので、そういったことを考慮しながら、航空会社は航路を開設し、皆様を運んでいる。

カンタス(QANTAS)の名の語源は、クイーンズランド・アンド・ノーザンテリトリー・エアリアル・サービス(Queensland and Northern Territory Aerial Services)の頭文字。カンタス航空は世界で2番目に古い航空会社。日本には1947年に現在の山口県の防府(編集部注:オーストラリアの在日空軍基地)に初就航した。その当時はマニラやインドネシアを経由して飛んだ。お客様は6名だった。その後、東京、名古屋、福岡、札幌、大阪に就航。大阪・名古屋はカンタスの子会社、オーストラリア航空がケアンズとの間を飛ばしているが、7月からカンタスをもう一度戻すことが決まった。オーストラリア航空は、カジュアルで、ビジネスクラスもなく、機内食も質素で、賛否両論あった。カンタス航空の客室乗務員は年配者から路線を選べる。日本は宿泊を伴うので買い物ができると、人気。若い客室乗務員はなかなか日本に当たらない。フレンドリーで、仕事を忘れて客と話し込んでいる客室乗務員もいるが、サービスをしているのか、していないのか、動かない年配の客室乗務員が多く、なかなか改善されない。

時代は「大型機で大量輸送」ではなく、「中型機で各地で飛ばす」ように変わってきている。今後も充実させていきたいし、民間交流のお手伝いもしていきたい。*カンタス航空 <http://www.qantas.com.au>

加藤栄「駐在員が見たオーストラリア」

昭和30年代は繊維業が盛んで、四日市に向けてどんどん羊毛が入ってきた。昭和34年、四日市港は世界一の羊毛輸入港だった。昭和40年代に入ると、物流の大きな変革があった。荷物がコンテナで入ってくるようになったのだ。昭和43年に四日市港とシドニー港が姉妹港提携を結んだ。それで四日市港管理組合と四日市商工の駐在員



代表のような形で、シドニーに3年間住んだ。国道23号線から入っていた所に霞埠頭がある。霞埠頭から入ってくる道を「シドニー道路」という。

現在羊毛は、オーストラリアから直接中国に行き、中国で縫製加工され、日本に安く入ってきている。今、四日市港では石炭を扱っていて、その65%がオーストラリアから来ている。

アメリカは「フロンティア・スピリット(開拓者精神)」だが、オーストラリアは「マイト・シップ」。オーストラリアのタクシーはドライバーの横に座る。「グッデイ、マイト」とか「ハロー、マイト」と挨拶する。マイト(mate)というのは、昔、イギリスから囚人がオーストラリアに連れてこられて、厳しい原野を強制労働させられ、お互いマイト・シップの固い絆でくじけなかった、それが残っているのではないかと思う。シドニーに日本人学校があるが、駐在員は自分の子供たちを日本人学校に入れるか、現地校に入れるか迷う。日本に帰ったら、受験戦争が待っているから、現地校に入れた場合は、日本からテキストなどを取り寄せて、補習しないと帰国してから困ることになる。オーストラリアの子供にとって、学校が勉強する所で、家は勉強する場所ではない。日本人家庭の学習机などない。クラブ用のシューズも靴下もすべて無料で借りて、走り回っている。今度W杯サッカーでオーストラリアと戦うが、日本は大丈夫か非常に不安である。

新聞によると、世界でいちばん外国人労働者の比率が多いのはオーストラリアで26%、次がカナダ、それからアメリカ。外国人が多いから、国が作った語学学校があり、駐在員の妻なども無料で教えてもらえる。最初の実力別クラス分けて、日本人の奥さんは上のクラスだが、シャイで下を向いていて、なかなか上達しない。やっぱり、人と人のつながりは、海外駐在にしろ、ステイにしろ、1週間であろうと、1年間であろうと、旅行とはちょっと違う。向こうの生活、環境、歴史、いろんなことが、肌で感じられる。旅行だと表面だけ。オーストラリアで暮らすと「アイ・ラブ・オーストラリア」になる。我々も日本にみえたオーストラリアの方に親切にして、民間のレベルでお互いに親しくなることが大事。そして、オーストラリアだけでなく、海外の皆さんに、中国や韓国といろいろな問題があるが、そういう問題を考えるにあたって、日本人は平和の好きな国民ですよ、広島、長崎に原爆を落とされた国ですよ、非核三原則が本当に死守されているかどうかかわからないが、とにかく、そういう国ですと理解してもらおうことが、個人と個人から、

将来、国と国、企業と企業の関係になったときに、絶対役立つと私は確信している。

上月晋吾「ミートパイの夜明け」



オーストラリア・NZを旅行した人でミートパイを食べた人にあまり会わない。旅行と滞在で違うらしい。若いワーキングホリデーで行ったお金の無い人たちに食べられているようだ。NZにいたときのランチで、手軽に食べられるので、そのときはおいしくて食べるのではなく、食欲を満たすために食べていた。けっしておいしいものという印象はなかった。ところが日本に帰ってきたら、無性に食べなくなった。ミートパイは日本にはない。名前はミートパイでも、アップルパイの中味のアップルを出して、詰め替えただけで、オーストラリア・

NZのものとは違う。なければ自分で作るしかないという思いでパイ屋を始めた。満足のいくミートパイを出せるようになるまでに3年かかった。食べ物は何でもそうだと思うが、おいしいということは、食べ慣れているということ。日本は飽食の時代といわれるのに、どうしてオーストラリアのミートパイがないのか不思議だった。おそらくアメリカの影響。ハンバーガー、ピザもイタリアのものだが、アメリカ経由。ネットでも販売しているので、これを機会に広めていただければと思う。*Rio Pies <http://rio-meatpie.com>

堂東美春「異文化と共通点」



私が英語を勉強しようと思ったのは、中学のときに、他の国の子たちと話ができるのが楽しいと思ったから。大学1年のときにホームステイでタスマニアに行った。最初のときは、文化の違いを感じた。家に靴で入るところ。水を大切にしている、「シャワーは5~10分以内にして下さい」と言われて、今まで20分も30分もお風呂に入っていたので、どうしようと思ったこと。主食のあまりない家だったので、ご飯は食べないこと。果物は皮ごと食べる。その後、タスマニア大学に1年間留学した。ホームステイのときは、あらかじめプログラムが決まっていた、

その通りにしていればよかったが、留学のときは、自分から授業を決めないといけないし、スケジュールを自分で組まないといけない。まず寮に入ったときに、知り合いや友人を作らないといけないと思った。いちばん最初に人に会ったときに何をしゃべるかという、「どこから来ましたか」「好きなものは何ですか」といったことだと思う。そこから同じものを見つけると、音楽が好きだったら、じゃあ今度一緒にCDを見に行きましょうとか、食べ物だったら、こういうレストランに行ってみましょう、そういうところからだんだん友人になっていく。寮の中で朝・昼・夕食を食べるのだが、違うということよりも、同じということが目に入ることが多かった。同じ日本人でも、コーヒーが好きな人もいれば、紅茶が好きな人もいる。オーストラリア人でも、ご飯が好きな人もいれば、パンしか食べないという人もいる。同じものが好きな人たちが集まっていて、共通点ということが人間関係を作る中で大切だと思った。

異文化を知るといことは、とても大切なことで、異文化の中に入っているときは、違う文化を体験してみる。自分と違うものでも、相手のことを尊重する。自分が受け入れられないことであっても、まず自分の文化を押し付けるのではなく、相手の文化を尊重することが大切だ。同じということ、似ているということをもっともっと大切にしていこうことが人間関係を作っていく上で重要だ。行く前は留学というのが大きなイメージだったが、現地に行ってみると、交流といっても、1対100、1対50、その国の人たち全部ではなく、話すときは1対1。国と国のレベルでなく、個人対個人で交流していく。世界青年の船に参加して、オーストラリアからの参加者もいたが普段話すようなことを話していた。

*世界青年の船とは、内閣府が行う国際交流事業の一つで、日本青年約120名と訪問国を含む世界15カ国の青年約150名が、約50日間船内で共同生活をしながら、北・中・南米及びオセアニア地域と、南西アジア・中近東・アフリカ・ヨーロッパ地域を隔年で訪問している。

安田元喜「いなべ市の海外交流～タスマニアとの交流の歩み」

いなべ市国際交流協会が今日に至ったきっかけは、平成5年に三重県に来日していたタスマニアの団体が、いなべ市に合併する前の大安町を訪れたときに、ぜひこれからも交流をしたいという申し入れがあった。そこで大安町国際交流協会が平成6年に中学生12名を募集してタスマニアに行ったのが始まりで、今年で6回目くらいになるが、毎年20名程送っている。帰ってきた子供たちの感想文を読むと、自然を大切に作る心、環境に対しての取り組み、エコに対する意識の高さを学んだようで、大変有意義な事業だと思っている。三重県にやっと国際課が出来た。ボランティアの心は大切だが、ボランティアだけでは、なかなかつながっていかない。私自身は、英語圏で行ったことがあるのはカナダだけ。南北朝鮮、ベトナム、バングラディシュなどに行ったことがある。国際交流協会でも語学講座をやっていて、小学生が100名くらい学んでいる。なぜタスマニアが選ばれたかという、子供たちを安全に連れて行けることがまず大事だったから。今年の4月からは、中国の子供たちとの交流も始めている。



リチャード・セニヴィラットナ「なぜ日本とオーストラリアの関係が大事なのか」



私が日本に興味を持ったきっかけは、日本のアニメや文化が好きだからではなく、大学1、2年のとき、インターナショナル・ハウスという寮で、毎年盛大な祭りがあり、たまたま日本人のお好み焼き屋台を手伝ったこと。日本のお好み焼きは大人気で、すぐに売り切れた。その後、自分達だけののお好み焼きパーティで、出席者は日本人ばかりなので、当然会話は日本語だけ。私は「こんにちは」くらいしか知らなかったので、「英語しかしゃべれんではダメだ」と思い、さっそく日本語講座に申し込み、日本人の友人からサークルを紹介してもらった。

いろいろな国の人たちがオーストラリアで英語を学んでいる。毎年何千人もの日本人がオーストラリアへ仕事や勉強に来ている。理由は若いうちに英語を習った方がいいからと両親に勧められてなど。そういう人たちは英語学校で半年から1年くらい勉強してから高校に入る。日本でお金を貯めて、学生ビザ、ワーキングビザでくる人もいる。その人たちは、半年くらい勉強して、あと半年は仕事をしたり、遊んだり、旅行したりしている。オーストラリアの短期大学を出た友人は、インテリアデザインを学び、バリバリ英語で仕事している。

オーストラリアには日本の自動車工場がある。日本はオーストラリアから、石炭、鉄鉱石などを輸入し、オーストラリアへは、自動車、自動車部品、コンピュータ部品などを輸出している。日本とオーストラリアは経済的に切り離せない関係になっている。私もおよばずながら、文化交流の一翼を担いたいと思っている。

< 質疑応答、意見など >

日の出、日の入りは？西から上って、東に進んでいる気がするが？

東から上って、北を通って、西に沈む。ケアンズからブリスベンやシドニーに向けて飛び立つとき、左側の席に座ると、すみれ色の日の出をラッキーだと見られる。豪はサマータイム(デイトライトセービング)を採用しているので、日の出を見やすいと思う。日本と違って遮るものがないので、広野でぜひ見て欲しい。一見の価値あり。

おすすめの遊びなどは？

短期旅行ならガイドブックを見て選べばいい(確認作業になってしまうが...)。三重豪NZ協会の旅行は、2~3週間。自分達で計画し、自分の足で歩いて、英語が上手でなくても自分でしゃべって、自分でパンを買って、自分でレンタカーを借りて運転している。参加した人は全員よかったと満足している。何でも自分でやってみること。ツアーはひとつのモデルケース。スーパーがおすすめ。どんなものを売っているか、どんなものを使っているか、安いし、お土産にもなる。お菓子など空港よりお買い得。商品は同じでも日本と機能が違っていたり、嗜好が違ったり、値段が違ったり、

学ぶことも多い。スーパーをのぞくことが地元の生活を知るひとつの手がかりになる。若い人に日本と違ったところ、人生の楽しさをどんな風に味わうか、遊び方、人間関係などを知ってもらいたい。できるだけ若いうちに経験してもらいたい。若い人で勘違いして、豪は安全だと日本でもやらないことをするのは危険。例えば、夜の海で泳ぐとか、夜道の一人歩きとか、それが事故や事件につながる。海外に行ったら何でもできるわけではない。危険な所には行かない、自分の命を守るということを常に考えていかなければいけない。それは当たり前のこと。当たり前のことを経験者が若い人に伝えていくのも大切。

四日市のオーストラリア記念館について

大阪万博(昭和45年)のオーストラリア・パビリオンを霞ヶ浦緑地に移設したもの。羊やカンガルーの剥製、羊毛、鉄鉱石、アボリジニのものなどを展示している。今回も愛知万博を記念して、オーストラリア館の巨大カモノハシの模型「ジャイアントカモノ」(全長12m、高さ2m)をいただいた。これを機に展示も一新して4月1日にリニューアルオープンした。ぜひお運びいただきたい。

*オーストラリア記念館 四日市市大字羽津甲5169 059-332-2357 http://www.city.yokkaichi.mie.jp/australia_kan/
JR富田浜駅より徒歩10分、近鉄霞ヶ浦駅より徒歩15分 午前9時~午後5時 月曜、祝日の翌日休館

日豪交流年記念事業その2 小中高生随想随筆コンクール

- 趣旨：一 若者の国際交流促進
- 一 若者の国際理解の促進
- 一 若者の日三重豪NZの「いいことみつけた」の促進

応募資格：小中高生

応募テーマ：夢を開く~日本とオーストラリアまたはニュージーランド

問い合わせ：宮本忠 059(368)2112

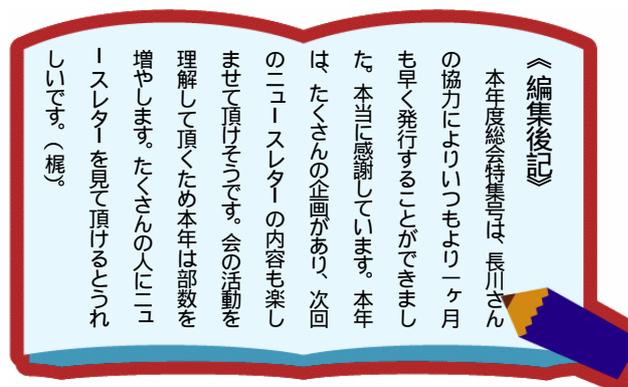
詳細は、折り込みチラシ参照

日豪交流年記念事業その3 オーストラリア物産市(四日市オーストラリア館)

10月中旬に四日市市役所商工課主催で行われるオーストラリア物産市に当協会も参加します。写真展、会場に応募箱を置いての日豪、三重に関するマンガ大賞などを計画中です。

6/17(土)世界・ふしぎ発見!「太古の地球 タスマニア タイムトリップ」オープニングで、タスマニア和太鼓チーム太鼓虎夢(ドラム)リーダー、サイモン・パイヤンさん他総勢50名が紹介されました。

サッカーW杯ドイツ大会、日本は初戦で名将ヒディング監督率いる豪州に1対3で逆転負け。2敗1分けの勝ち点1で1次リーグ敗退。豪州は1勝1敗1分けで1次リーグF組2位となり、初めて決勝トーナメントに進みました。



<事務連絡>
 会費未納の方は納入をおねがいします。
 百五銀行津市役所出張所
 ミエゴウエヌセットキョウカイ 82920
 新たにEメールでの配信をご希望の方
 & fax059-368-2112 宮本まで。

発行 三重オーストラリア・ニュージーランド協会
 発行責任者 宮本忠 Tel/Fax 059(368)2112
 〒510-0226 鈴鹿市岸岡町2626-95
 HP: <http://www.ztv.ne.jp/yosshi/>
 Eメール: ty1005@mecha.ne.jp
 この会報にある文章・写真の無断掲載はご遠慮下さい。